

ラフカディオ・ハーンから 小泉八雲へ

光原百合

2015年12月5日に開催した第七回おのみち文学三昧には、ゲスト講師として小泉凡先生をお招きし、「文化資源としての人と文学——ラフカディオ・ハーン小泉八雲をめぐって」という演題でご講演いただきました。ラフカディオ・ハーン（帰化した後の日本名が小泉八雲）はアイルランド出身の文人で、ジャーナリストとして訪れた日本を日本人以上に愛し理解し、その文化や民話を世界に紹介した人物です。小泉凡先生はその八雲の曾孫にあたられ、当日は八雲の生涯と、その作品を現代にどのように生かしていくかについて、大変興味深いお話をいただきました。

ご講演に先立つ11月10日、私は小泉先生のご講演のいわば露払いとして、尾道文学談話会において「ラフカディオ・ハーンから小泉八雲へ」と題し、小泉八雲の人物とその作品について紹介を行いました。ここでもその内容に基づき、この魅力的な文人について簡単な紹介をまとめさせていただきます。

1. 誕生（1850年）から幼少期

ラフカディオ・ハーンについて先に「アイルランド出身」と書きましたが、彼の出自には一言ではまとめきれない複雑さがあり、それがハーンの文学を形成するうえで重要なポイントとなっています。

パトリック・ラフカディオ・ハーンが生まれたのはギリシャのイオニア諸島の一つレフカダ島。父チャールズ・ブッシュ・ハーンは、当時ギリシャに駐在中の英国陸軍に所属していた軍医でした。母はローザ・アントニア・カ

シマチ、やはりイオニア諸島の一つであるキシラ島の旧家の娘だったということです。ハーンファーストネームのパトリックはアイルランドの守護聖人である聖パトリックに、セカンドネームのラフカディオは生まれた土地であるレフカダ島にちなんでつけられた名前です。父と母、それぞれのくにへの想いを託されたような美しい名前だと思います。

しかし残念ながら、この結婚はその後、不幸な経過をたどることとなります。ハーンは二歳のとき、母ローザと共にダブリンにあるチャールズの実家に移りました。しかし言葉も宗教も違い（ハーン家はアイルランド教会、ローザはギリシャ正教の信者だったそうです）、知る人もほとんどない土地（夫チャールズは軍務で留守がちでした）、それも陽光溢れるギリシャとは対照的に冷涼なアイルランドで暮らすことは、ローザにとって大変な精神的負担であったことは想像にかたくありません。

やがてローザは精神的に不安定になり、ハーン四歳のとき、息子を置いてギリシャに帰国します。ハーンは生涯二度と母に会うことはありませんでした。チャールズはその後、結婚前の恋人とよりを戻して再婚。ハーンは父方の大叔母、サラ・ブレナンに養育されることとなります。

母に置いて行かれた哀しみと母への憧れは、終生ハーンの心につきまっていたようです。後年ハーンは日本の民話を再話して海外に紹介しますが、その代表的な作品の一つ「雪女」では、夫の破約によってともに暮らすことがかなわなくなり、子どもを置いて去っていく雪女の悲しみを描いていますし、「飴を買う女」では幽霊になっても子供を育てようとした若い母親を描き、〈母の愛は死よりも強い〉と述べているのです。

母との別離の原因の一つとなった父には、ハーンはおそらく反発を禁じ得なかったでしょう。彼が自分の名前のうち、父につながるアイルランド由来の「パトリック」のほうはほとんど使わず、もっぱらギリシャ由来の「ラフカディオ」ばかり使っていたのは、そこにも理由があるのかもしれませんが。しかし、ハーンがアイルランドそのものをどう思っていたかについてはあまり資料が残っていないようですが、必ずしも反発一色ではなかったらしく、小泉凡先生のお話によれば、アイルランドの詩人ウィリアム・バトラー・イエイツへの手紙の中で、〈私はアイルランドを愛するべきだし、実際に愛している〉という意味のことを述べているそうです。そして彼がアイルランドを

愛する理由としては、母がギリシャに帰ってしまったのち、幼いハーンの面倒を見るため雇われた女性キャサリン・コストロの存在が大きかったようです。彼女はハーンに数々の妖精譚を語り聞かせたようで、彼が後年、幻想文学に大きな興味を持ち、日本の民話の中でも妖怪や幽霊の話を積極的に再話して残したのは、このあたりのことが素地になったのかもしれない。

2. 思春期から青春期

ハーンの大叔母サラ・ブレナンは夫の遺産を相続して裕福だったので、子ども時代のハーンは物質的にはそれほど苦労しなかったようです。しかし、十六歳から十七歳にかけて不幸が立て続けに彼を襲います。

1866年、十六歳のとき、友人たちと遊んでいて遊具のロープが顔に当たり、左目を失明しました。ハーンはこのことをずっと気にしていたようで、その後の写真を見ると、必ず目を伏せているか、横を向いて右の横顔だけを見せているかで、左目が不自由であることがわからないようにしています。

話は少し逸れますが、キリスト教伝来以前のアイルランドにはケルト民族の文化があり、ハーンが愛していた妖精譚はケルト文化の名残といっているでしょう。そのケルト妖精譚の中に、〈ある女は、妖精の薬が片目にかかって妖精の姿が見えるようになった。街で人々に紛れていたずらをしている妖精の姿を眺めて楽しんでいたら、妖精の一人がそれに気づき、彼らの姿を見ている方の目を爪で突いて潰してしまった〉というものがあります。いわば、妖精たちと関わった代償として片目を失うという物語です。日本の民話の中でも「一つ目」の存在が不思議な知恵のあるものとして登場することがありますし、北欧神話の最高神オーディンも、知恵を得るため片目をささげて隻眼となった存在として有名です。片目を失ったハーンが、後年妖怪譚や幽霊譚を人々の間に広める役割を果たしたことを思うと、何やら象徴的なものを感じます。ハーンがこういった話を知っていたかどうかはわかりませんが、もし知っていたら、わずかでも慰めになったでしょうか。

さて、片目を失うという奇禍に続いてハーンが父が病死。さらに大叔母のサラ・ブレナンが出資していた投機が失敗し、サラは破産します。彼女に養育されていたハーンも窮乏状態に陥り、カレッジも退学を余儀なくされます。放浪の青春時代の始まりでした。

3. 青春と放浪

ハーンは1869年、新天地を求めてアメリカに旅立ちました。しかしハーンの人生を俯瞰すると、経済的に困窮したのはあくまできっかけに過ぎず、放浪の旅は彼の本質であったのではないかとも思われます。母のふるさとギリシャと父のふるさとアイルランド、二つの文化のあわいに生まれ、両親との関係がうまくいかなかったこともあってそのどちらにも安住の地を見いだせなかったハーンにとって、人生はそれを見つけるための旅だったかのように思えるのです。アメリカを離れる1890年まで、暮らした土地はシンシナティ、ニューオーリンズ、ニューヨークなど。西インド諸島でも二年ほどを過ごしています。

ハーンは早くから文筆の道を志していたようで、経済的事情でアカデミックな教育を受けることは叶いませんでしたが、生活のために様々な職を転々としながらも勉強を続け、やがて新聞記者として、オンザジョブ・トレーニングのように文章力とジャーナリストとしての観察眼を鍛え上げました。ハーンの書いた記事を読んだことがありますが、新聞記事でありながら豊かな詩情をたたえたものであったことが印象に残っています。

この時期に博覧会で日本の展示品に心を惹かれたり、日本研究家であるバジル・ホール・チェンバレンが訳した「古事記」を読んだり、友人の旅行家から日本の印象を聞いて好感を抱いたりしたことを通じて、ハーンの中には日本への憧れが醸成され、やがて日本への旅立ちにつながりました。

4. 日本へ、そしてラフカディオ・ハーンから小泉八雲へ

1890年、ハーンは日本についての記事を書く特派員のような役割で日本を訪れました。どれくらいの間滞在するつもりだったかはわかりませんが、結果的に日本が彼にとって終生の安住の地となります。求めても得られなかった故郷ホームを日本に見出したのです。

ハーンにとって日本が故郷ともいべき存在になったのは、もちろん気候風土や文化が気に入ったためもあるでしょうが（ハーンが来日したのは四月、満開の美しい桜に迎えられたことでしょう）、最も大きかったのは後に夫人となる小泉セツ（節子）との出会いだったように思えます。来日後、雇用主であるハーパー社と報酬のことその他で喧嘩、絶縁してしまったハーンは、

生活のため英語教師の職を得て松江に赴任します。ここで身の回りの世話をしてもらったため士族の娘であった小泉セツを雇い、二人の間に愛が芽生えてやがて正式に結婚します（それに伴い、ハーンは日本に帰化してセツ夫人の実家の名字である「小泉」と、来日直後に滞在して愛着の深かった松江・出雲にゆかりの言葉「八雲」を自分の名としました）。当時、外国人と日本人の間での正式な結婚は非常に珍しく、それによってハーン＝八雲は外国人の仲間の中でやや軽んじられるような扱いも受けたようですが、八雲にとってはセツ夫人と、彼女との間に生まれた子どもたちへの責任のほうがはるかに大切なことだったのでしょう。

セツ夫人は、それまで八雲が求めて得られなかった暖かい「ホーム」を与えただけでなく、彼の仕事上においてもかけがえのないパートナーとなりました。少し意外なことですが、八雲は日本文化を深く理解し、愛しながらも、日本語についてはそれほどの上達を見せなかったようで、ことに読み書きは手に余りました。彼が日本の民話や昔話を再話して不朽の名作とした「雪女」「耳なし芳一」などの物語の多くは、セツ夫人が語り聞かせたものです。セツ夫人は自身も物語が好きで、語り部としての卓説した力を持っていたようです。

ハーンは松江、熊本、神戸、東京と、日本でも何度か住まいと職を変えています。それはしかし、かつてのような安住の地を求める放浪の旅ではなかったでしょう。それなりの苦労はあったにしろ、彼のそばにはいつもセツ夫人と子供たちがいたのですから。

小泉八雲は1904年9月26日、心臓発作で亡くなりますが、その直前にセツ夫人にこんな言葉を残したと、夫人の自伝である「思い出の記」に語られています。片言のような拙い表現でありながらこれほど心を打つ文章はめったにありません。これを読んだだけで、ラフカディオ・ハーンから小泉八雲になった彼の長い旅の終わりが幸せなものであったとわかるでしょう。

「この痛みも、もう大きいので、参りますならば、多分私、死にましよう。そのあとで、私死にますとも、泣く、決していけません。小さい瓶買いましよう。三銭あるいは四銭位のです。私の骨入れるのために。そして田舎の淋しい小寺に埋めて下さい。悲しむ、私喜ぶないです。あなた、子供とカルタして遊んで下さい。如何に私それを喜ぶ」

参考文献

- 『怪談四代記 八雲のいたずら』 小泉凡著 (2014年 講談社)
- 『小泉八雲』 田部隆次著 (1980年 北星堂書店)
- 『小泉八雲とカミガミの世界』 平川佑弘著 (1988年 文芸春秋)
- 『小泉八雲と松江時代』 池野誠 (2004年 沖積社)
- 『作家の自伝82 小泉八雲』 池田雅之編・解説
(1999年 日本図書センター)
- 『ハーンの轍の中で』 ジョージ・ヒューズ著 平石貴樹＋玉井暉訳
(2002年 研究社)
- 『文学アルバム 小泉八雲』 小泉時・小泉凡共著 (2008年 恒文社)
- 「第七回おのみち文学三昧」における小泉凡先生のご講演内容も参考にさせていただきます。